

JIC インフォメーション

第226号 2023 年 10 月 10 日
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NSビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真は、本紙記事より抜粋

- 《ロシア語留学の現在位置》ラトビア・リガでのロシア語研修
……光嶋 桜子 (大阪大学外国語学部ロシア語学科) ……2P
- 《特別寄稿》「ロシア語映画発掘上映会」への挑戦
……守屋 愛 (ロシア語字幕翻訳者) ……5P
- 《連載》こんな時代にロシア語のすすめ
「コーカサスのインチキ通訳」……黒田 龍之助……8P

- 《ロシア関係情報》
ロシア文化フェスティバル・オープニング、ほか……9P
- 《本の紹介》『反戦平和の詩人 四國五郎』
……山口 ミルコ……10P
- 《講演録》「モスクワ特派員時代の出来事」
……小柳 悠志 (中日新聞 前モスクワ支局長) ……12P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ウクライナ戦争の長期化によって、旅行・留学など日ロの人的交流は難しい状況が続いています。それでも、困難を押ししてロシアへの留学に挑む人もいますが、最近では第二の選択として、ロシア以外の国でのロシア語留学・語学研修を検討する人が増えています。前号では、中央アジアのカザフスタンでロシア語留学を続けている木村恭輔さん（東京外国語大学）のインタビューを掲載しましたが、今号では、今夏ラトビアのリガで2週間のロシア語研修を行った光嶋桜子さん（大阪大学外国語学部）の体験記を紹介します。光嶋さんは21年9月からモスクワ大学に留学し、ロシアのウクライナ侵攻で予定を3か月切り上げて帰国を余儀なくされました。今夏のロシア語研修はその時の空白をとりもどす旅でもあったようです。ともあれ、ラトビアでのロシア語研修事情を知る上で、光嶋さんの体験記はとても参考になります。（編集部）



語学学校リデン&デンツ リガ校がある建物入口

ロシア語留学の現在位置

ラトビア・リガでの語学研修

光嶋 桜子（大阪大学外国語学部4年生）

【ラトビア留学を決めた理由】

運命の定めなのか。9.11 という平和を見つめ直す日に、戦争を始めることになる国に飛び降り、その2年後に、戦争によって奪われた3ヶ月の生活を取り戻すべく、ラトビアで再びロシア語留学が始まった——。単なる偶然さえも、通るべき道のように思えた。

奪われた3ヶ月の生活を取り戻すとはどういうことか。ロシア語に囲まれた生活を送りながら、芸術に触れ、ヨーロッパを巡る。これこそ、私が、ロシアの長い冬が終わってからやりたかったことだ。当時(2021-2022年)は、コロナ禍であり、ロシア政府が承認したワクチン（スプートニクなど）を打っていないと、芸術に親しむのが難しかった。国内外を旅行するにも、PCRの陰性証明証が必要だった。22年になり春が近づくとつれ、コロナも落ち着き始めた矢先、戦争が始まった。

知らない世界をたくさん見させてくれた。人生において大切になるであろうことを教えてくれた。見返りを求めているのかと心配になるほど、人のあたたかさに触れた。そんな文化や人と私の架け橋になったのが、ロシア語だった。まさに、私のバイブルだ。

日本でも、ネットでロシアのバレエを見たりロシアの音楽を聴いたりしていた。ウクライナから来た人たちと、ロシア語で話す機会も定期的にあった。それでも、なにかが足りなかった。自分がロシア語に囲まれていないから。

ロシア語の語学学校に通い、ロシア語を話す。街では、なるべく英語ではなくロシア語を話す。家に帰ったら、ロシア人と暮らす。

これだ。私が喉から手が出るほど求めていたのは、これだ！

学生生活最後の夏休みくらい、悔いのないものにしようじゃないか。こうしてリガでの短期語学留学が始まった。

【留学生活の概要】

◇ 学校の概要

私が学んでいた、リデン&デンツ リガ校は、リガ新市街にあり、中心地から徒歩10分弱のところにある。私は、歩くのが好きなので、毎日25〜30分ほどかけて徒歩で登校していたが、トラムを使えば、ホームステイ先の最寄りのバス停から10分ほどで学校に着く。アクセスは非常に良い。

授業は1日、100分×2コマだ。私の場合は、12時40分に終わったので、午後は自由に使えた。具体的な過ごし方は、後述するので、そちらを参照にしていきたい。ちなみに、もっとロシア語を学びたいという人は、別途、個別授業を追加することもできる。

◇ 授業の詳細

まず、前日や週末に何をしたか、あるいは、授業後や週末に何をやる予定なのかを話す。次に、ニュースをもとに意見交換をする。先生は「議論」っていうけれど、あの授業の回

し方的には、議論なんてとんでもない。時間が余れば、教科書を進める。

基本、クラスメイトはよく話したので、教科書をやる時間はなかった。留学生のレベルの都合上、1 番上のクラスが B1 レベルで、決して高くはない。だから、個人的には、教科書をやる時間が少なく、話す時間が多かったのは、プラスに働いた。

ここで、モスクワ大学の授業と、時間割と規模の点から比べてみよう。

まずは、時間割について。

リデン&デンツ リガ校のロシア語の授業は、1 週間に、100 分×2 コマ×5 日=1000 分。一方、モスクワ大学のロシア語の授業は、1 週間に、90 分×3 コマ×3 日=810 分。後者は、ロシア語による講義が、1 週間に 90 分×2 コマ×2 日=360 分ある。より多くの角度からロシア語を学びたい人は、モスクワの授業の方が良いだろうし、自分のレベルにより近い授業でより多くアウトプットをしたいという人は、リガの授業の方が良いだろう。

次に、規模について。

モスクワ大学の方が、学校の規模が大きいので、レベル分けが細かい。そのため、中級者以上 (CEFR でいうと B1 以上) の学習者にとって、自分のレベルにより適した授業を受けられるのは、モスクワだと思う。逆に、リデン&デンツ リガ校は、

◇ 授業外の課題

毎日、何らかの記事を要約する必要がある。これは、例の「議論」のためだ。テーマはなんでも OK。私は、日本のジェンダー問題から好きなアーティストまで、ソフトな話題もハードな話題も選んだ。

唯一意識していたのは、日本のことを知ってもらうこと。モスクワとの大きな違いだが、日本人をはじめアジア人が少ない。通っていた 2 週間は、アジアからの生徒は私以外、誰一人いなかった。そのため、授業が無意識レベルで「ヨーロッパ基準」で進んでいく。みんなが、「議論」のために持ってくる話題もそう。私はそこに馴染みたくなかった。せめてこの 2 週間は、彼らにとって遠い存在のアジアの島国について、知って欲しかった。だから、日本の今を反映している話題に固執した。しかしそれは、日本が抱えている問題というようなハードなものだけではなく、アニメ以外の日本のカルチャーなどソフトなものも含んだ。「アニメの日本」や「真面目で礼儀正しい日本人」以外の色んな顔とも出会ってくれたらという思いがあった。

それ以外には、言うまでもないが、日々の復習と宿題をしていた。ここでいう復習とは授業内容に限らない。日常の会話でうまく言えなかったことや新たに出会った語彙を、辞書とノートを使って、整理していた。

◇ 授業外の交流

ホストファミリーの先生とは、リガ郊外の沿岸リゾート地 ユールマラ に行った。リガから電車で、30 分ほどで行ける。駅に着くと、木々が広がっていて、1 キロほど歩くとバルト海が見えてくる。ビーチでは、シャシュリクという焼き鳥のようなストリートフードが焼かれていて、月曜日の午後でありながらも、夏の終わりを楽しむ人で賑わっていた。別の日には、ラトビア国立オペラ劇場でバレエを観た。ロシアと同じように、バレエを鑑賞しやすい。チケットも 1 番安いものだと 1500 円程度の席があり、ドレスコードもない。ラトビア国立オペラ劇場のバレエは、フランス式だったため、ロシアとはまた違うバレエの魅力を味わえたことはとても良かった。

語学学校の友達とは、郊外のショッピングモールやスケートリンクに行ったり、ティーハウスでお茶をしたりした。また、週末は、隣国エストニアに留学をしている友達が遊びに来てくれたので、一緒にリガを観光した。



旧市街(リガ歴史地区)に広がる中世の街並み



ホームステイ先の先生にスィールニキの作り方を教わる

◇ ひとりの時間

博物館・美術館に行ったり宿題をしたりした。リガには多くの музей がある。私はこの 2 週間で、①ラトビア占領博物館 ②KGB 博物館 ③ラトビア・ユダヤ博物館 ④リガのゲッ

トーとラトビアのホロコースト博物館 ⑤ライマチョコレート博物館 ⑥ラトビア国立美術館 を訪れた。ラトビアでは、負の歴史を伝える博物館のチケットを買い求めやすい。②～④の 3 つの博物館は、無料で楽しめた。

加えて、文字で記録をすることが好きなので、SNS で留学日記をつけたり、ブログを公開したりも。もちろん、疲れて昼寝をしていたら 1 日が終わったなんて日もある。



【ウクライナとの関わり】

ラトビアに来る前に寄った、フィンランドやエストニアでも、ウクライナの国旗を見かけることは少なくなかった。それでも、ラトビアに来て、街中のウクライナ国旗の多さには、度肝を抜かれた。

カフェの店内や外に、ウクライナ国旗が掲げられている。トラムの窓に、ウクライナ国旗のステッカーが貼られている。電柱や壁に、ストリートアートのような形で、ウクライナ国旗が描かれている。ウクライナ人の入館料を無料とする博物館がある。スーパーでは、ウクライナ産のものは、値札に国旗が描かれている。ウクライナ語のスクールや教材が、町の至るところにある。

ここまでは、大陸というヨーロッパでは、変わらない街並みなのかもしれない。しかし、ラトビアは平均して、いわゆる「西欧」の国に比べ、より強い思いがあるように感じた。これは、ラトビアとウクライナが、ナチスとソビエトに抑圧されたという共通の歴史を持つことから推測できる。実際、上述した負の歴史を伝える博物館では、ウクライナの過去や現在に言及した展示も数多く見受けられた。たとえ特別なデモがなくても、特に誰かが何かを言わなくても、社会全体で強いメッセージを共有している。少なくとも私はそう肌で感じた。

そんな今でも、多くのラトビアの人にとって、言葉に罪はないようだ。町ではロシア語は頻繁に耳に入るし、実際に、ロシア語を話して嫌悪感を示されたことはなかった。若い人の中には、ロシア語が全く分からない人もいる。そのような

場合は、英語にスイッチすればすむ話だ。アジアの女の子が、ロシア語を話すことは面白いらしい。お褒めの言葉や強い興味まじりの驚きの反応をいただくことは、何回もあった。

なるほど、ロシアという国や政府には、全力で抵抗するが、ロシア語という言語を排除しようとするつもりは、今のところないのだろう。

おかげさまで、ロシア語を公用語としない国での留学生活でありながらも、後ろめたさを感じることなく、ロシア語留学を満喫することができた。

【ロシア語を学ぶということ】

ロシア語を学ぶと、ロシア語で書かれていることや話されていることが分かるようになる。それらが分かるようになると、ロシア語を話す人たちの考えや思いの片鱗に触れられるようになる。それができるようになると、目の前に広がる扉の数が増える。世界が何倍にも広がる。

ロシアは、日本や西欧諸国とは別世界だ。西側と東側という概念を持ち出すとすれば、西側諸国では当たり前のが当たり前ではなかったり、考えられない論理が、立派なルールとしてまがり通っていたりする。ロシア風の生活に慣れるのに気疲れしたのが、そして、「おそロシア」とは全く違うロシアの日常を発信してみんなのリアクションを楽しんでいたのが、懐かしい。

ロシア語を選んでしまったことで、現地での留学生活は途中で打ち切りになり、私たちとかの国の距離は離れてしまった。戦争が起きてから、芸術や学問のフィールドでロシアと関わり続ける人に、冷たい視線が向けられることも増えた。

それでも私は、ロシア語との出会いに後悔をしていないどころか、感謝をしている。なぜなら私のバイブルだから。言葉を通して見えた／見えている世界や、かの国で過ごした半年は、言葉では表現しようがないほど尊くかけがえがないもので、生きる力を与えてくれている。

もしあなたが、付き合う言語を選ぶ際に、将来のキャリアで得をしたいという基準を大切にするのであれば、ロシア語を全力でお勧めすることは出来ない。言わずもがな、戦争により、日本企業のロシア市場は縮小している。ロシアの文化や言葉を排除する動きも目立ち始めている。ロシア語でお金を稼ごうとするのは、遠回りのように思える。

ロシア帝国の詩人、フョードル・チュッチェフは、次のような言葉を残している。

Умом Россию не понять. /ロシアは頭では分からない。

そのような世界に胸が躍るような人にこそ、ぜひ、ロシア語を学んでほしい。ロシアという謎に包まれた世界の扉を開けられる数少ない鍵が、ロシア語なのだから。

「ロシア映画祭 in 東京」(2017 年～19 年)でお世話になった守屋愛さん(慶應義塾大学ロシア語講師)が、『ロシア語映画発掘上映会』を今年 1 月から開催されています。たった一人で企画を立て、上映権を取得して、日本語字幕制作、上映会場の確保、集客宣伝をやってのけ、すでに 1 月、5 月、7 月、8 月と計 5 回 7 作品の上映会を実施するという活躍ぶりです。守屋さんに『ロシア語映画発掘上映会』開催の顛末とその成果、今後の予定などについて寄稿していただきました。(編集部)



企画、上映権取得、字幕制作、会場確保、観客集め、
そして上映会実施まで、1人でみんなやってみた——

《ロシア語映画発掘上映会》への挑戦

守屋 愛 (ロシア語字幕翻訳者)

今年、「ロシア語映画発掘上映会」を個人主催して、今日までに全部で七本のソ連映画を公開上映することができました。このことについて、後進の皆さんに少しでも参考になればと考え、その経緯や結果を記したいと思います。

そもそも私は JIC 国際親善交流センターが中心となって開催していた《ロシア映画祭 in 東京》をきっかけに、字幕翻訳の世界に本格的に入ったと言えます。2017 年秋に初めて《ロシア映画祭 in 東京》が行われたときは観客側のひとりでしたが、翌年の第 2 回映画祭で、映画《ドミニカ》の字幕翻訳からスタッフとして加わりました。三年目の 2019 年映画祭では、ロシア映画すべてに日本側の実行委員会が日本語字幕をつけることになり、その責任者をしました。映画祭が軌道にのって、きっとこれからも毎年開催されるだろうと思った矢先、コロナ禍とウクライナ侵攻に見舞われ、毎年の恒例行事は中断してしまいました。これはとても辛いことでした。

映画祭での活動と前後して、劇場公開映画の仕事も引き受けました。大きなきっかけは、私が修士論文で取り上げた作家セルゲイ・ドヴラートフの伝記が、アレクセイ・ゲルマン Jr. 監督によって《ドヴラートフ レニングラードの作家たち》として映画化されたことです。これは私が引き受けた初めての劇場公開映画でした。他にも、キリル・セレブレンニ

コフ監督の《インフル病みのペトロフ家》、ウクライナの映画監督セルゲイ・ロズニツァ氏のドキュメンタリー映画《国葬》、《肅清裁判》、《バビ・ヤール》、《Mr.ランズベルグス》、《新生ロシア 1991》、《キエフ裁判》と字幕翻訳を手がけてきました。今年の年末に公開される予定の映画もありますが、これはまた情報が公開されたら皆さんにお知らせしたいと思います。

さて、こうして嬉々としてロシア語映画に字幕をつけていた私ですが、コロナ禍とウクライナ侵攻の影響を受け、国内で上映されるロシア語映画の数が激減する事態に陥りました。最近では年に映画七本のペースで字幕をつけていましたので、仕事が急になくなると大きな喪失感に見舞われます。自分の気持ちをよくこんな風に例えるのですが、たとえば編み物好きに編み物をする糸がなくなってしまった、そんな風に自分を感じました。

ちょうどそんな頃でした。偶然のめぐり合わせですが、昨年(2022 年)住まいの近くに《札の辻スクエア》が完成しました。札の辻スクエアは、三田図書館と港区産業振興センターが入った港区の複合施設ですが、その港区産業振興センター内に映画上映に適したホール小がありました。中小事業者もしくは個人事業主として届け出をすればそのホールを利用できるということがわかり、急遽個人事業主として登録をし

した。ホール小は座席数が最大 120 で、大きなスクリーンと最新映像設備があります。こうして、まず場所ができました。

さらに、一般の字幕翻訳家ならば、きっと字幕を作る過程だけを担当したと思いますが、《ロシア映画祭 in 東京》の時から、作成した字幕ファイルを映画に焼き付ける作業を、やってくれる家族が私にはいました。技術的な問題も解決です。

ですから、映像素材があって、そして上映権があれば、日本語字幕をつけて上映する技術と場所はあるという状態まできていました。では、どこから上映する映画素材と上映許可をもらうか。経験がなかった当初は、ここが一番の難関に思われました。「権利者との交渉」という次の経験を私にさせてくれたのは、慶應義塾大学の三田祭で学生たちが主催したロズニツァ監督映画《マイダン》の上映でした。彼らが上映をするにあたり、ロズニツァ監督のプロデューサーであるマリヤさんと上映の条件をつめていくという経験をしました。この成功が大きな自信につながります。私でもできるのだと。このとき売れっ子だったロズニツァ監督の作品のアカデミック上映権は 300 ユーロ(当時約 50000 円弱)。相場を知っていくことも大切です。

昨年秋、ホール小の日程を押さえた私は、あとはどこから、どの映画の上映権をもらうかという問題を抱えていました。そんなとき、偶然ですが、ロシアのゴス・フィルム・フォンドのホームページをざっと見ていたときに、ふと、映画上映権の参考価格の一覧表を見つけました。見てみますと、ソ連映画 1 回の上映で、2 万ルーブル(日本円で 30000 円ほど)です。失敗しても再起不能になるほど高額ではありません。そして、ホール小の貸出料も港区の事業者ということになれば、1 万円ほどで借りられる。これならば、個人でも挑戦してみることができる！やってみよう！と気持ちが高ぶりました。

早速、ゴス・フィルム・フォンドの所蔵フィルムリストを探したところ、ブルガーコフの《犬の心臓》として知られている有名小説の映画がありました。私の記憶では、東京大学の学生だった頃、安岡治子先生がご自宅のパラボラアンテナから録画したビデオを見せてくださったように、覚えていますが。当時はロシア語能力が低かったので、ロシア語の聞き取りもできませんでしたが、ブルガーコフの小説を読んでいたもので、何となく話をたどり、とても面白かったという印象が残っていました。ぜひこの映画に字幕をつけて皆さんにも見せたいと思いました。

早速ゴス・フィルム・フォンドにロシア語で手紙を書きます。いつも返信は翌営業日。ゆっくりと打ち合わせが進んでいきました。一日に一回質問。翌日に返事。次の日また問い合わせ...とスローペースです。上映場所はどこか、上映時間は、上映回数は、会場は何人入れるか、などなど。話がすべてまとまったと思ったら、なんとロシア文化省の許可を待つ羽目にもなりました。許可が下りるまで待つてほしいと言っ

てきたのです。1 月 8 日を上映予定にしていたのですが、12 月になっても返事が来ず、本当にこれは実現できるのだろうかとか、心配になっていました。結局 12 月下旬になって、もうそろそろロシア側も仕事納めであろうというときに、「もうタイムリミットです。許可がいただけなければ今回のこの企画は実現することができません！」と泣きつきました。すると、ゴス・フィルム・フォンドの責任者が「自分が許可するので OK」という念書と、高画質の映像を送ってくれました。それは、なんと上映会十日前。ここから情報公開をしてお客さんが来てくれるのだろうかという心配もありましたが、SNS に情報アップしました。もちろん、字幕制作の仕事もそれと同時進行です。

1 月 8 日の上映会の成功を私は Facebook にこう書き記しています。

「多くの方に支えていただき、『犬のハート』上映会が大盛況のうちに終わりました。Twitter 上でも好意的なご意見を多数いただき、主催者として大変うれしく思っています。上映後のトークでは、筑波大の梶山祐治さんに興味深い解説をしていただきました。その後には、慶應義塾大学学生有志『慶應ロシア語の森』による 2 月 23 日ロズニツァ監督『マイダン』の上映会予告もありました。会場で石井信介様が販売していた訳書『犬の心』と著書『奪われた革命』は完売になったとのこと。また、本会場が多くの人にとって出会いや再会の場になったことも、うれしいことでした」

成功体験は、さらにつぎの企画への大きな原動力になります。当初は年 3 回上映会ができたらいいと思っていたのですが、やり終わった後の充実感と高揚感に押され、直後から次はどの監督の上映するか、どの映画を上映するかと悩み始めました。アイデアはいくつかありましたが、ちょうど今年レオニード・ガイダイ監督が生誕 100 周年を迎えていて、ロシアの映画界ではよく言及されていました。もちろん、日本人でもガイダイ監督を知っている人は多くいますが、あれほどの監督の作品がこれまで日本では上映されてこなかったという事実が、とても残念に思われました。

そこで、生誕 100 周年であることを機会にガイダイ監督の映画を大々的に紹介してみたくなりました。調べてみたところ、ガイダイ監督の映画はほとんどモスフィルムがその上映権をもっています。モスフィルムと交渉したところ、とても好意的に私の計画に協力してくれました。まずは試しに《イワン・ワシリエヴィチ 転職する》の上映を決めました。5 月 6 日に向けて、春休みを準備期間につぎ込みました。

5 月 6 日の上映会もうれしさの中に終わりました。

Facebook に私が書いた言葉は、「レオニード・ガイダイ監督生誕 100 周年記念上映会《イワン・ワシリエヴィチ 転職する》昨日、盛況のうちに無事終了しました。Twitter やメールで感想をたくさんお寄せいただき、ありがとうございます。今日みなさんからの感想をまとめ、会場の写真と一緒に、

モスフィルムに御礼状を送りました」

実際、皆さんからいただいた当時のツイッターやメールをまとめ、モスフィルムに送ったところ、大変喜んでいただきました。本当にみなさんに感謝です。

東京で《イワン・ワシリエヴィチ 転職する》を上映した際、実は、SNS で京都大学の学生さんから、「自分はガイダイ監督を卒業論文のテーマとしていて、どうしても観たいのだけれど、あいにくその日はどうしても用があつて観に行けない。何とか見ることができないだろうか」という非常に熱心なメッセージをもらっていました。実はこの熱心な学生さんは村瀬信さんと言って、モスフィルムが公式で YouTube にアップしている《カフカスの虜 またはシューリクの新たなる冒険》にマクシモヴィチ・ブジャコフのペンネームで日本語字幕をつけた、その人です。彼の字幕をどれだけの人が観て、この映画を楽しんだことでしょうか。

村瀬さんから「どうにか見たい。何とか見ることができないか」という熱心なメッセージをもらい、そういう人がいるならば、ぜひとも見せに行きたいと思ったのが、次へのステップでした。これも、偶然の重なりですが、ちょうどこの頃、大阪の独立系映画館《第七藝術劇場》で、リフォームのためのクラウドファンディングをしていました。そのクラウドファンディングのリターンに劇場貸切権が付いていたのです。札の辻スクエアのホール小も悪くはありませんが、なんといっても本物の映画館の暗幕の中で観る映画！映画好きな人ならきっと共感してもらえますと思いますが、ぜひとも、街中の映画館でガイダイ監督の映画を上映してもらいたい！と気持ちが進みました。

こうして実現した大阪での上映会には、なんと、スポーツニクスの記者が来ていたので、大阪上映会の話はスポーツニクス(のなぜかキルギス版)にロシア語ニュースとして掲載されました。「ガイダイ監督の映画が大阪で劇場初公開され、満員御礼だった」というふうに。

ついでに大阪上映会では、さらに大阪大学にもガイダイ監督で卒業論文を書きたいという学生さんがいることが判明し、ロシア語映画仲間がどんどん増えていったのであります。

5月6日の上映会も、多くの方にお越しいただき、ご好評いただきました。モスフィルムとのやり取りが大変うまくいったので、8月も札の辻スクエアのホール小を3日間とっていたこともあり、続けてガイダイ監督作品の紹介をしたいという気持ちでいました。それなので、そのまま生誕100周年の企画を続行する形で、ガイダイ監督の映画を三つ取り上げようと考えました。当初の計画では、《ダイヤモンドの腕》、《12の椅子》、《デリバソフスカヤ通りは晴れ あるいはブライトンビーチはまた雨》の三作品を取り上げようとしたのですが、モスフィルムから最後の作品はモスフィルムに権利が

ないと連絡が入りました。ガイダイ監督最後の作品なので、残念ではありましたが、本当の権利者を探して、新たに一から交渉する時間はないと判断し、代わりに《作戦”あ”またはシューリクのその他の冒険》をリクエストすることにしました。結果としてこの三作品を選んだことは、ガイダイ監督の作品を紹介するにあたり、大変バランスの良い選択になったと思います。シューリクや悪党三人組のシリーズから一本。ガイダイ黄金の10年から一本。ガイダイが文学作品の映画化に取り組んだ時代から一作品。しかも、どれも超有名な作品ばかりです。

この夏の上映会が終わったときの私の感想はこうでした。「2023年8月14-16日 レオニード・ガイダイ監督生誕100周年記念上映会、3日間の日程を無事終了しました。映画を観てくださったお客さまは、のべ342人。お盆の暑い時期、台風の影響も危惧されるなか、ご参加くださった皆さまに心から感謝いたします。ロシア文化研究者の田中まさきさん、ロシア・ウクライナ・中央アジア映画専門の梶山祐治さん、すばらしいレクチャーをありがとうございました。そして、運営を支えてくれた若い皆さん、企画の実現は皆さんのおかげです。どうもありがとう。レオニード・ガイダイの陽気で素敵な世界が、これからも少しずつ日本に広まっていけますように」

夏の上映会にはおまけの追加上映会を実施しました。これは村瀬さんが SNS 上に「自分もいつか解説付きで、《カフカスの虜》の上映会をやりたい」と書いていたことがきっかけです。そのとおり、村瀬さんの字幕で《カフカスの虜》を上映し、解説をしてもらいました。おまけで私が字幕をつけた《仕事人たち》も同時上映させてもらいました。

その時のコメントです。

「26日(土)、モノクロのボルシチ・ウェスタン(ソ連製西部劇)映画《仕事人たち》の上映をもって、【レオニード・ガイダイ監督 生誕100周年記念 夏の上映会】が終わりました。最終日には若きガイダイ研究家 村瀬信さんのレクチャーも。夏の上映会では、他に《作戦”あ”とシューリクのそのほかの冒険》《ダイヤモンドの腕》《12の椅子》《カフカスの虜あるいはシューリクの新たなる冒険》と、合計5本の日本未公開映画を公開することができました。お客さまはのべ500人弱。2回上映の映画もあったので、簡単に比較はできませんが、一番人気は《12の椅子》の128名。直接または SNS 上で、うれしいご感想をたくさんいただきました。ありがとうございます」

エース・スクエア(個人事業の屋号)の《ロシア語映画発掘上映会》はまだまだ続行予定です。

うまく交渉がまとまれば12月24日と1月7日に、それぞれ別の映画をお楽しみいただけます。

いつも応援くださる皆さんに深く感謝いたします。

こんな時代にロシア語のすすめ 第5回

「コーカサスのインチキ通訳」

黒田 龍之助



アルメニアにあるレストラン「コーカサスの虜」

今年の春、ロシア人女性カーチャさんと会って喫茶店で2時間ほど話しました。病気が広まっている間は日本人と違って会えないくらいでしたから、ロシア人と対面なんて何年ぶりでしょうか。それでもロシア語を忘れることはなかったようで、これまでと同じようにお喋りしていました。

カーチャさんはにっこり笑いながら、2つのことをいいました。「黒田先生のロシア語はほとんどロシア人と変わりませんね」「でも話の進め方や表現の仕方が、レオニード・ガイダイの映画みたいです」

実をいえばガイダイ監督の映画は大好きで、中でも『コーカサスの虜、あるいはシューリクの新たな冒険』はDVDでくり返し観ています。フォークロアを収集するシューリクは、訪問先のコーカサス地方でニーナと知り合います。彼女は女子大生で、親戚の家で夏休みを過ごしているのですが、彼女のことを見初めた地元の有力者がニーナの叔父に、ヒツジ20頭と冷蔵庫1台を引き換えに嫁として「買い取る」ことになりました。叔父さんは納得しましたが、ニーナはするはずもありません。そこで有力者は略奪婚を企み、そのため怪しい3人組が雇われるのですが.....。

映画が製作されたのはソビエト時代の真ただ中。こういうものに親しみながらロシア語を学んできたから、わたしが話すのは「ソビエト・ロシア語」なのでしょうか。しかもコメディ調。カーチャさんはわたしと話しているとよく笑います。かつて一緒にラジオのロシア語講座を担当したことがあったのですが、わたしが書いたロシア語教材の会話文を読んでも笑います。そしていつも「昔のコメディ映画みたいです」このことなんです。

地元の有力者役の俳優は少々癖のあるロシア語を使います。いかにもコーカサス風という感じを出すためでしょう。とはいえこれは演技で、インタビューに答えるときは標準的なロシア語で答えていました。

わたしのロシア語は、カーチャさんによれば「ほとんどロシア人と変わらない」そうですから、つまりは微妙に違うわけです。日本語を身に付けてからロシア語を学び、いまだに現地で長期滞在したことがないんですから、それも当然でし

よう。また旧ソ連はいろんな人がロシア語を話していましたので、多少の癖は誰も気にしていませんでした。わたしがJICの通訳としてあちこち出かけたときも、こっち（つまりソ連）に住んでいるのかとよく尋ねられました。ということでロシア人かといえば微妙ですが、ソビエトの人間といえば当時はそれで通用したのです。

これはときにとっても便利でした。

旧ソ連の問題点は今の若い人にもいろいろ伝わっていることでしょう。闇ドルってご存じですか。ソビエトでは外貨でしか買い物ができない外国人向け商店があり、そこは一般商店と違って品物が豊富にありました。現地の人だって外貨ショップで買物をしたいのですが、ふつうのソビエト市民は外貨を持っているはずがありません。そこで外国人観光客に近づいて、正式な手続きを踏まずに外貨（主にドル）を手に入れようとするのです。もちろん違法行為です。外国人にとって多少はレートがいいかもしれませんが、見つかったら罰せられます。わたしは絶対に手を出しませんでした。

しかしこういう輩はしつこいのです。交換したくないといえばレートをよくすると粘ります。外貨は持っていないというとなんかはずはないと頑張ります。本当に面倒くさい。

そういうときに、わたしのロシア語は便利でした。

闇ドル屋さんは英語で話しかけてきます。下手な発音で「チェンジ・マネー？」と聞いてくるのが定番。そういうときはイエスとかノーとか、英語で返事をしてはダメ。そうではなく、英語で捲し立てる相手をじっと見つめ、話が終わってからロシア語でこういいます。

悪いけど、俺、英語ダメだから。

これだけだと相手はロシア語に変えてさらに粘ります。そこで次のセリフになります。

なんだか知らないけど、さっき中央アジアの実家からモスクワに来たばっかの俺が、アメリカのお金なんて持つてるわけないじゃん。

相手は驚きます。なんだ、ソビエト人だったのか。どこの共和国か知らないけど、そういえばそんな顔つきだ。こりゃ時間を無駄にしたな。

ということで、見事に撃退できるわけです。

わたしは以前からカザフ人に似ているといわれていました。中央アジアに暮らす人々の風貌の差異は分からないのですが、必ずカザフ人で、ウズベク人やタジク人ではないらしい。だから旧ソ連ではカザフ人ということにしておくと、こんな感じで便利だったのです。

しかし、それも臨機応変に対応しなければなりません。

前回お話したウズベキスタン旅行は、朝鮮系以外にもさまざまな人や物に出会いました。ロシアやウクライナといったスラブ圏では見慣れない風景や習慣は楽しいものです。とくに食べ物がおいしくて、わたしと友人が気に入っていたのはプロフ、つまり中央アジア風ピラフでした。屋台で安く売っていて、羊肉の大好きな二人は見かけるたびに試していました。

そういうとき、現地人からよく話しかけられました。地方の人間はどこでも気さくで、外国人観光客に対しては好奇心も手伝っている質問してきます。ただし、ソ連崩壊後も闇ドル屋さんはいましたから、気をつけなければなりません。

あるとき二人でピラフを食べていたら、地元のおじさんが英語で話しかけてきました。「あんたらドル持ってるかい？」

こちらもすかさず答えます。俺たちは旧ソ連の人間だから、そんなものはないよ。「おや、あんたロシア語が分かるのかね」うん。「お連れさんはどうだい？」いや、彼は民族語だけだから。

大嘘もいいところですが、こういうやり取りは慣れたものです。

相手はさらにこんなことをいい出します。「あんた、ロシア語うまいけど、ちょっとだけクセがあるね」

わたしは一瞬、うん、カザフ系だから……と答えようとして、ハッとしました。ここはウズベキスタン、つまりカザフスタンの隣国。下手な嘘をつくとはバレそうです。そこで咄嗟に出身地を変えました。

うん、母がアルメニア系だから。

後で考えると無理があつた気もするのですが、相手はあっさり信じました。広い旧ソ連について、すべての共和国を知っている人はそれほどいません。といえますか、そんなことはどうでもいいのでしょうか。このときのおじさんにしても、この話題を掘り下げることはなく、それよりも何かうまい儲け話はないかと、もっと面倒な話をしかけてくるのでした……。

わたしはアルメニアを訪れたことがありません。でも興味は昔からあって、もし旧ソ連の言語を新しく学ぶとしたら次はアルメニア語にしようと、密かに教材を集めているのです。

久しぶりに会ったカーチャさんは、ちょうどアルメニアから帰ったばかりでした。ロシア語研修の付き添いで、首都エ

レバンに行ったそうです。現地では少々古風で正統派のロシア語が話されているので、研修も十分に可能だとのこと。

さらに彼女がわたしに勧めてくれたのが、レストラン「コーカサスの虜」。ガイダイの映画をモチーフにした民族料理店だそうで、「黒田先生だったら、絶対に気に入りますよ」いいですねえ。

わたしは最近、アルメニアに出かけてロシア語を思いっきり話し、それから少しだけアルメニア語を使ってみるために、現地を訪れることを夢見ているのです。



日ロ交流情報

ロシア文化フェスティバル 2023

7月 28 日にオープニング・コンサート



ロシア文化フェスティバル 2023 のオープニング・コンサートが、7月 28 日、東京・千代田区の紀尾井ホールで開催されました。

来日した若手ソリストのうち 3 名は、今年の第 17 回チャイコフスキー国際コンクールで入賞を果たした実力者たち。

- ・ヴァシーリイ・ステパノフ (チェロ) 6 位
- ・イリヤ・パボヤン (ピアノ) 3 位
- ・フォードル・オスヴェル (オーボエ) 2 位

会場はほぼ満席で、日露の演奏家が奏でるラフマニノフ、ムソルグスキーなどロシア音楽の調べを堪能しました。

ロシア文化フェスティバル 2023 のプログラムはホームページでご確認ください。→ www.russian-festival.net

シベリア抑留犠牲者追悼集会

千鳥ヶ淵墓苑で開催 (8 月 23 日)

第二次大戦後 (1945 年)、ソ連・スターリンが「日本人捕虜 50 万人のシベリア移送」を命じた秘密指令発令の日 (8 月 23 日) に毎年行われているシベリア抑留犠牲者追悼集会が、今年も東京の千鳥ヶ淵戦没者墓苑で開催されました (主

催；シベリア抑留者支援・記録センター)。集会には約150名が参集し、日本政府による積極的な実態説明や遺骨収集、次世代への歴史の継承などを求めました。



抑留犠牲者に献花と黙とう(千鳥ヶ淵墓苑にて)

日ロ友好愛知の会が講演会(9月23日) オンライン・シベリア墓参も開催

日ロ友好愛知の会の講演会が9月23日、名古屋駅前の国鉄会館で開かれました。中日新聞モスクワ支局長で、この4月に帰国した小柳悠志記者が、4年近い特派員生活を振り返り、ウクライナ戦争前後のロシア社会の動向や取材環境の変化などについて、話しました(12頁に講演録収録)。

また、翌24日には、コロナ下の2020年から愛知の会が行なってきたクラスノヤルスク日本人墓地へのオンライン墓参を今年も開催。シベリア抑留で亡くなられた方々への追悼を行いました。

愛知の会は、ロシア文学者の亀山郁夫氏(名古屋外国語大学学長)の連続講演会を10月~12月に予定するなど、活発に活動を続けています。

北極・シベリアから発掘される冷凍マンモスと同世代の肉食獣たち

日本ロシア協会が講演会(9月30日)

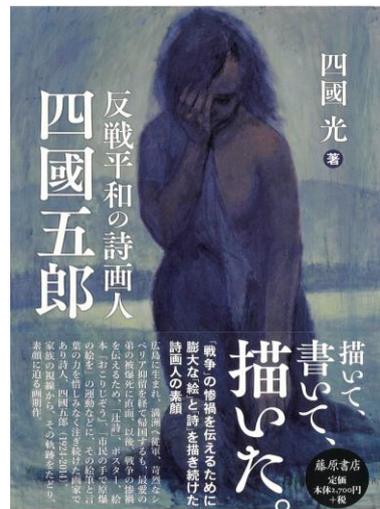
9月30日、東京お台場の日本科学未来館の会議室にて、「北極・シベリアから発掘される冷凍マンモスと同世代の肉食獣たち~日露共同研究プロジェクトの成果と今後」と題して、日ロ協会の講演会が開催されました。参加者は約20名。講師は、この共同研究を提唱し、ヤクーツクで発掘された冷凍マンモスの解剖や分析に携わってこられた鈴木直樹・早稲田大学理工学部教授。

地球温暖化の中で、シベリアの永久凍土の溶解が進み、何万年も前の動植物の標本が発見されており、これらを解析し、動植物の進化と環境適応変化を解明していくうえで、「垣根のない科学技術協力」が、国と国の間でも、また各学問分野の間でも、求められていることが話されました。

広島出身のシベリア抑留体験者で、帰国後、弟の原爆死に直面し、非核・反戦・平和の詩画人として生涯を全力で生き抜いた四國五郎氏の評伝が、その息子である四國光氏の手によってまとめられ、藤原書店から出版されました。「シベリア抑留者支援・記録センター」の通信(23年7月)に掲載された山口ミルコさんの紹介文を、同センターとご本人の了解を得て掲載させていただきます。(編集部)

本の紹介

『反戦平和の詩画人・四國五郎』



四國光 著
藤原書店
四六判 448頁
カラー口絵8頁
定価；2970円(税込)

軍隊、抑留、原爆…父の軌跡をめぐる旅

山口 ミルコ (作家)

四國五郎を父に持ち、反戦平和への情熱の炎に炙られながら育った四國光が、父を亡くして9年目にしてその評伝を書き切った。いつかお書きになるだろうとは思っていたが、このたび、出た。重度の心臓疾患を抱えながら父の死に向き合い、近現代史を学び直し、研究者や体験者の話に耳を傾け、家族の歴史をひもとき綴られた『反戦平和の詩画人 四國五郎』(藤原書店)は、持ち重りのする渾身の一冊とっていい。

私が初めて四國光さんに会ったのは、2016年『原爆の図』の丸木美術館でのことだった。本書にも出てくる、永田浩三氏とのトークイベントに足を運んだ。

そこで私は「辻詩」なるものを初めて知った。

若き日の五郎さんは占領下のいわゆる「Reverse Course」のなか、反戦の「Hit & Run」ともいべき平和へのメッセージ詩画を峠三吉と製作、<貼り逃げ>しまくった三年をへて、以降、平和を願う広島の市民画家として、「母子像」に代表される、ぼう大な仕事をした。「とにかく父は一日中描いていました。毎日毎日描いていた」と話す光さんの、このと

きはまだ、父の軌跡をめぐる旅は始まったばかりだった。

四國五郎は 13 歳で新聞配達、その配達途中でスケッチを始めた。

同じく 13 歳で、広重の『東海道五十三次』の画集を借りて、全模写。このくだりを読んで、私はジャズピアニストの穂吉敏子さんが、はじめてジャズ理論の本を借りたとき、全ページを書き写して即、本を返却したという話を思い出した。何かを為す人が目覚めるときの勢いとはこんなものかもしれない。

14 歳で母と二人の弟を養わねばならなくなり軍需工場に勤務。絵描きになるので勤務を減らしてほしいと上司に言って大目玉をくらうなか、自ら申し出て工場内のポスターを製作、それが評判を呼ぶことに。ここで自分の描いた絵が印刷されるという初体験をする。

やがて入隊。

「コラ、よいか、キンタマは左へ入れるぞ！」とか言う上等兵の前で、新しい軍服に身を包む。この瞬間、<父は子どもの頃から愛してやまなかった芸術と抒情の世界から、容赦のない暴力の世界へ身も心も放り込まれることになる> (本文)。

戦場の話をほとんど家でしなかった五郎だが、光と、姉の美絵にいちばんよく話したのが、執拗に繰り返された軍隊内での暴力のことだったという。のちにいわゆる「民主運動」にみちびかれるのも<下級兵士が「生き延びる」ための反軍闘争>だった。

あと 1、2 日戦闘が長引いていたら戦車に飛び込むことになっていた五郎は、シベリアに抑留され、極限状態を生きるなかで、表現の持つ力に目覚める。<臨死にまで至る体験と引き換えに絵の新しい修練と、軍国主義とは異なる新しい思想、世界観を手に入れることができた> (本文)。そして隠れて書き溜めていた豆日記やデッサンを、命がけで軍靴の奥に忍ばせ、帰国 (ダモイ) を果たした。

しかし、そこで待ちうけていたのは愛弟・直登の原爆死。巻末に収録されている直登の日記を必ず読んでほしい。その死は五郎を打ちのめす。ここからが、彼の人生本番なのだ――。

全編をとおして、息子による父にまつわる「憶測」が投げかけられ、読者はその謎解きと答え合わせに併走することになる。「父」の人称が進められるのがはじめ気になったが、これはやはり「父」で書かれなければならなかったのだろう。構成も観察描写も上手く、五郎本人の詩もふんだんに織り込まれて、最後まで読者を飽きさせない。「ベトナム戦争と四國五郎」ののところなど、1956 年生まれの著者ならではの勢いがあり、もっと読んでみたいと思った。著者の次の仕事が楽しみだ。五郎は晩年病を発症し、亡くなるまでのほぼ 15 年は、彼のもっともやりたかった仕事ができなかった。描かれるはずだった『わが青春の記録』(私のレジスタンス)の続編とも

いえるシベリア抑留を総括する本――そこへ、おそらく物語は繋がってゆくのだろう。

軍隊とシベリア抑留と原爆――二度と同じ道を歩まぬために、「あとをよろしく」とバトンを手渡された光さんは、誰かの長男というめずらしい肩書で、今日も体調を気遣いながら精力的に活動を続けておられる。展覧会は「気づき」の場。どうしても「継承」してほしい、絵を眺めるだけでなく「活用」してほしい、それが地獄を見た作家の、強靱な遺志、そして希望だ。

決してあきらめてはならない。

私たちは今日も四國五郎の絵の前に立つことができる。

「おお、そうよ、ようわかったのう」

その声を、私たちは聞くことができるだろうか？

本の紹介

『ウクライナ動乱～ソ連解体から露ウ戦争まで』

松里公孝著／ちくま新書／512 頁／定価：1430 円 (税込)

読みごたえのある本だ。これほど精緻にウクライナ政治を研究し、その動向をあとづけている人はいないのではないかと。

ウクライナ戦争の背景には、NATO (北大西洋条約機構) の東方拡大、ロシアによるクリミア併合や東部ドンバス紛争の和平案 (ミンスク合意) をめぐる対立がある。著者は、こうした問題点を主にウクライナ側から分析し、ロシアが軍事侵攻に至った経過を解説している。その際、著者の視点は、「ソ連崩壊の延長としての今次ウクライナ戦争」である。

「本書で問いかけていたいことは、私たちはまだ 1989 - 91 年に始まる社会変動の只中にいるのではないかということである。特に、ソ連継承国の多くは、1990 年の経済水準を回復していない。金さえあれば何でも買える便利な資本主義社会にあって、庶民は 35 年前の生活水準を回復していないのである」「貧困の問題が直視されない代わりに、親露派對親欧米派という二項対立が、現地について何も知らなくても現地情勢を説明できてしまう魔法の杖のように振られる」(はじめに)と著者は言う。

今やロシアの一部になってしまったが、クリミアの政治家もドンバスの政治家も、プーチン政権の思い通りに動いていたわけではなかった。民族解放闘争を経験せずに、ソ連崩壊から棚ぼた式に成立したウクライナという国家の政治が、豊かな経済生活を基盤とした市民国家を作る方向ではなく、反親欧米の民族国家を作る方向にひたすら進み続けたこの 30 年間の結果が、現在の惨状を引き起こしたのだと言える。ウクライナ戦争の背景と今後を理解する上で、必読の書としてお勧めしたい。(F)

ウクライナ戦争下の モスクワ記者生活

9 月 23 日、日ロ友好愛知の会のロシアサロン“シベリア”講演会が開催されました。以下は、中日新聞・東京新聞の特派員として 4 年間モスクワに滞在し、本年 4 月に帰国された小柳悠志記者の講演録です。ウクライナ侵攻前と侵攻後でロシア社会の動きや取材環境がどう変わったか、大変興味深い話を聞くことができました。日ロ友好愛知の会と小柳記者の了解を得て、掲載させていただきます。(編集部)

日ロ友好愛知の会 ロシアサロン“シベリア” (9月23日)

講演録

モスクワ特派員時代の出来事

小柳 悠志 (中日新聞記者・元モスクワ支局長)

私がモスクワに赴任したのは 2019 年 11 月ですが、その前に 1 年間モスクワの大学に留学しておりました。当時のロシアはすごく安定していて、穏やかで住みよかったです。私の見るところ 2020 年の夏ごろからフェーズが変わって、22 年 2 月のウクライナ侵攻後は、私たちメディアの活動もかなり制限されるようになりました。

2020 年に何があったかと言うと、3 月にロシア憲法が改正されて、プーチン大統領がさらに二期、最大 2036 年まで任期を延長できることになりました(憲法規定では大統領の任期は二期までだが、改正時点での大統領経験者はこの規定が適用されないことになった。改正案は 7 月の国民投票で承認)。それに続いて、ベラルーシ大統領選挙(同年 8 月)でルカシェンコ氏が再選を果たした後に不正選挙に抗議する大規模なデモが起きました。ロシアでは反プーチン政権の中心人物であるアレクセイ・ナバリヌイ氏の暗殺未遂事件があって社会が動揺し、反政府運動が盛んになりました。

また、アルメニアとアゼルバイジャンのナゴルノ・カラバフ紛争が 20 年 9 月に再燃して、かなり多くの死者が出ました。中央アジアのキルギスで政変がありましたし、ウズベキスタンのカラカルパク自治共和国でも自治権をめぐる中央政府との争いが起こり、旧ソ連のあちこちで問題が噴出して、現在に至っているということです。

カムチャツカの原子力潜水艦基地を取材 (21 年 10 月)

この時期に記者として取材していて良かったことは、22 年に侵攻が始まるまではロシア政府は外国に対しても完全にオープンで、ロシア軍の演習ツアーに多く参加できたことです。21 年 9 月の「ザーパード 2021」、その前年の「カフカス 2020」といった軍事演習に行くと、プーチン大統領臨席のもと、多くの外国部隊が参加した状態で、ロシア軍が自分たちをどういうふうに見せようとしているか観察することができました。

ロシアにはムルマンスクとカムチャツカに原子力潜水艦基地があって、ここは外国人にも普通のロシア人にも閉ざされた完全な閉鎖都市なのですが、私は 21 年の 10 月にカムチャツカのリュバチ原潜基地を取材しました。潜水艦部隊の隊長に話を聞いて、さらに原子力潜水艦の艦上にも乗せてもらった(22 年 1 月 12 日、1 月 17 日の 2 回に分けて、中日・東京新聞夕刊に掲載)。あとでロシアメディアの知り合いにこの話をしたら、「戦略弾道ミサイルを載せた潜水艦を外国人に見せるなんてことは普通ありえない」と非常に驚いていました。

2021 年秋までは非常に緩やかだったロシア軍取材

この軍事侵攻でロシア軍のイメージは非常に悪いのですが、この頃を振り返ると、ロシア軍はオープンというか、むしろかなり緩い状態でした。「カフカス 2020」の取材に行く時も、記者証だけでパスポートチェックをしないままモスクワ近郊の軍事飛行場(チカロフスキー空港)から飛行機に乗せられました。一方、21 年に見学した極東原潜基地はロシアの安全保障にとって最重要施設の一つです。核を積んだ潜水艦は海中に潜んでいるからこそ、アメリカや敵国から攻撃を受けても守られ、即時に反撃できる態勢が作られているわけです。停泊している時は無防備なので、そんなところを外国人に見せるのは安全保障上かなりリスクがあると思われます。この取材の時は前日にパスポートのコピーを送れと言われて、送ったら翌日に入れてくれました。閉鎖都市の取材は、ロシアメディアの記者でも通常は許可を取るのに 3 ヶ月くらいかかるのですが、この時はもう前日にパスポートを送るだけでした。

それから、基地の内部は機密なので、余分なものが見えないように移動のバスの中はカーテンで目隠しされています。軍の警察隊が乗り込んで盗撮などしていないかチェックするのですが、それがロシアらしくて、バスが古くカーテンが縮

す。

コンサートには多くの観客が集まります。モスクワに外国人はもうほとんど残っていないのでロシア人が安くチケットを買って、コンサートを楽しんでいます。

ただ一方で、よく目を凝らすと、ウクライナ侵攻を支持するような絵やポスターもあります(写真)。



(左)店に貼られた「兵士募集ポスター」 (右)街角のポスター

2020年頃までは反政権運動も活発

2020年頃は結構騒がしくて、ナバリヌイ支持派のデモに多くの人が集まって、「ナバリヌイを解放しろ」「もっと暮らしをよくしろ!」と叫んでいました。これに対して、ОМОН オモンという特殊部隊(ОМОН/デモ鎮圧などを主任務とするロシア内務省直属の警察部隊)が出てきて参加者を捕まえるのですが、戦争に反対する集会よりもそれ以前の反政権派デモの方がよほど盛り上がっていた。「捕まるかも知れないけど、捕まってもそう大したことないや」という、少しあまいムードがあったのですけれども、21年に入るとどんどん取り締まりが厳しくなっていました。

ボリショイ劇場前の広場でナバリヌイ派の集会とデモを取材した時のことです。ナバリヌイの支持者たちがデモをしていたところに ОМОН の部隊が到着すると、みんなパァ〜と散って逃げてしまいました。その後で ОМОН の部隊は何をしたかという、一般市民を捕まえ始めた。ボリショイ劇場の前を普通に歩いているカップルをいきなり捕らえるとか、携帯電話で話してる人を捕らえる。デモ隊はもうどこかに行ってしまうのに、何かノルマでもあるのか、とにかく順番に人を捕まえていった。私は広場のそばで写真を撮っていたのですが、ボリショイ劇場の前からだんだん人がいなくなって、黄色のベストを着たメディア関係者だけになっていくと、次に ОМОН がやったのはメディアの人も順番に捕まえていくことでした。これはまずいと思って、バス停から急いでバスに飛び乗りました。この時は非常に恐ろしかったです。

すぐに終息した侵攻後のロシアの反戦運動

ウクライナ侵攻が始まった時、ロシアでもかなりのデモがあったと皆さん思われるかもしれませんが。東京新聞の記事でも、「抗議が世界に広がる」という見出しで「モスクワで軍事

行動に反対するデモ参加者」という説明のついた写真が載りました。写真では、たくさんの人が反戦デモをしているように見える。(東京新聞の記事、2022年2月26日朝刊)

この時、私は現場にいたのですが、写真のうち8割の人はデモと関係のない通行人です。トヴェルスカヤ通りを歩いて行くと、プーシキン広場に人が集まっていたのですけれども、みんな少し怖がっている様子で、プラカードを掲げている人はほんのわずかでした。戦争が始まると、ロシア人はみんな凄く動揺したのですが、あまり抗議には出なかったというのが実際のところだと思います。

ウクライナ侵攻で、日本でも多くの人にロシアはひどい国だと思われていたのですが、当初私が心がけたのは「反戦活動を毎日一つでも取り上げよう」ということでした。ロシアでも戦争に反対している人はいるし、ロシアは決して戦争一色に凝り固まった国ではないと伝えたかったのですが、2〜3週間もすると反戦の動きはほとんど見かけなくなりました。

家庭内で若いリベラルな若者たちは家族に「この戦争はおかしい。ウクライナは兄弟国家なのに何故攻めるんだ」と言うのですけれども、政府のプロパガンダを信じる親の世代は「お前何を言ってるんだ。ウクライナは本当にナチス国家で、今やらないとロシアが滅ぼされるんだ」と言う。親子が議論して大喧嘩するということが最初の一か月は非常に多かったといえます。若者たちには国を見捨てて出ていく人もいましたが、親や祖母母とは話が通じないけれども、ここに残るしかないかとあきらめる人が多かったようです。

侵攻後、多くの若者が「頭脳流出」

「頭脳流出」でアルメニアに逃げて行った人たちの話を記事にしました(中日新聞22年4月19日)。私がアルメニアで取材したナスチャさんという女性は、モスクワ高等経済学院を出たエリートですが、侵攻直後に移住した。アンドレイさんは兵役拒否を広める反戦運動をやっていた法律の専門家です。首都エレヴァンのシェフチェンコ像(シェフチェンコはウクライナの詩人)の前で、ロシア人たちが反戦集会を開いていました。

私がナスチャさんに、「名前を出してもいいのですか?ロシアに帰れなくなって、危険ではないですか?」と聞いたら、「もう怖がることに疲れた。ロシアでは怖くて何も言えない。それなら自分を守るために国を出て、何でも正直に発言したい」と、すごく潔く言っていたのが印象に残っています。

侵攻後2か月で、10万人を超えるロシア人が、アルメニアやジョージア、カザフスタン、トルコ、イスラエルなどに移住したと言われています。その大半はIT技術者など専門職の若者たちです。モスクワのIT技術者の給料は最低でも月2000ドル。ロシアではかなり高給の人たちです。20代30代の若さで、英語ができて、こういう人たちはどこの国でもやっつけられる。このときのアルメニアは本当にすごい賑わい

で、IT 企業によっては飛行機をチャーターして、アルメニアのホテルを一棟まるごと借り切り、社員全員がアルメニアに移って仕事をするようにした会社もありました。こういう人たちがいる一方で、大多数のロシア人は国に残されるという形になっていました。

外国メディアが置かれた状況～強まる規制

ロシアで取材を続ける外国メディアはどうなったかと言いますと、それまで 3 年おきだったビザ更新が、非友好国のメディアは 3 か月おきの更新になりました。ビザを更新したら、すぐ次の更新手続きを始めないといけない。そして、ビザが切れる当日にならないと次のビザが出ない。そうすると、少しでもロシア政府に睨まれたらビザが更新されないのではないかと不安感を抱えながら仕事をすることになるわけです。

同時に、取材などで外国に行く度に、空港の出入国管理で止められて、どこへ行くのか、目的は何なのか、あれこれチェックされます。場合によっては別室に呼ばれ、「スマホ見せてください」とか、「この画像は何ですか」とか問われる。それが 1 時間とか 2 時間とか続くので、出国するときに出国させてもらえなくて、飛行機を逃してしまった、荷物だけ乗せて、飛行機が飛んだ後によりやく解放された、そういうことも時には起きるようになりました。これは、担当者レベルの話ではなく、上からの指示で「非友好国のメディアであれば取り調べる」といった形になっているのだと思います。

反政権派からのメッセージ

侵攻が始まると、ほとんどのロシア企業や政府官庁は日本メディアの取材に応じなくなりました。その一方で、反政権派の人たちで、「どこにも自分たちの意見を伝える手段がないので、日本メディアに取り上げてほしい」と言って、私たちに連絡をくれる人が結構いました。

これまでも私たちは反政権派の取材をしてきたのですが、取材の度にその記事をロシア語に直して送り返してきたんですね。すると、「自分の記事と写真が、東京新聞・中日新聞にこんなに大きく載った」と喜んで、SNS で発信する人もいたりして、そういうふうにまいた種が、戦争がはじまると、「私たちのことを取り上げてほしい」ということで、駆け込み寺のような状態になりました。もちろん、すべて取り上げるわけではなくて、実際に反政権派かどうか、記事にする価値があるかどうか、ある程度判断して取材するわけですが、

23 年 3 月 29 日の中日・東京新聞夕刊で、ジョージアに亡命して、「反プーチン政権」「戦争反対」を叫ぶヴェーラさんというロシア人女性を取り上げました。彼女も、モスクワ支局に「私を取り上げてください」と連絡してきた人です。

この人はチェチェン出身の母親から反プーチン的な考えを吹き込まれて育ってきた、筋金入りの活動家です。ジョージアでは反ロシア感情が強い面があって、ジョージアの新聞

社に「日本のメディアでこういう記事が載りました」と見せると、「この人は本当に反プーチンだ。西側メディアでも取り上げられてるんだから、ウチでも取り上げようか」となって、反戦運動の輪が広がるのではないかと期待が彼女にはあったようです。



ロシア最大手の石炭会社 SUEK の社長インタビュー

市民レベルの反政権派だけではなく、ロシアの大企業からも同じようなメッセージを発する取材をしたことがありました。

シベリア石炭エネルギー会社 (SUEK) というロシア最大手の石炭会社があります。世界でも有数の石炭会社です。日本はじめ欧米諸国がロシアに経済制裁を加える中で、ロシア石炭産業の採掘状況や、中国やインドなどへの輸出がどのように行われているかということは、経済分野の大きなテーマで、私はダメもとでいくつかの石炭会社に取材を申し込んだのです。そしたらなんと、SUEK (スエク) から「取材に応じます」「社長がインタビューに応じます」と言ってきた。しかも、書面インタビューではなく、直接インタビューに応じると言う。スエクといえば、ガспロム (天然ガス) とか、ロスネフチ (石油) とか、いずれもその分野でロシア最大手の会社です。それが社長自ら会って話をすると。これはただ事ではないと思って取材に行きました。

スエクにももちろん狙いがあります。中部電力を含め日本の多くの電力会社はスエクから石炭を買っています。しかし、岸田政権がロシアからの石炭輸入を停止する方針を打ち出す中で、新規契約が難しくなった。スエクは既存の契約を履行するのみで、今後対日輸出は減っていくことになる。したがって、ロシアとしては日本や欧州に売れなくなった分を中国やインドなど新興国に売るのは当然なのですが、ソ連時代から続いてきた日本との石炭契約を何とか維持したい。日本メディアの取材に応じることで、何とか石炭ビジネスを維持したいという思惑があったわけです。

しかしそれだけではなく、スエクのバソフ社長は仏教徒で、毎年のように日本に来て鎌倉など見て回っているのです。「この軍事作戦=侵攻をどう思いますか?」と聞くと、「私は



ウクライナ侵攻を続けるロシアからの石炭輸入を欧州連合（EU）が停止し、世界のエネルギー市場が混乱を来している。ロシア石炭業界最大手スエク（SUEK-シベリア石炭エネルギー会社）のマキシム・バツフ社長（右）は本紙インタビューに応じ、米露の対峙を懸けて中国やインドの市場開拓を急ぐ考えを明らかにした。日本にも引き続きロシア産石炭の購入を促す一方、ウクライナの現状について懸念を示した。（モスクワ・小柳悠志、写真も）

最大手「スエク」社長 世界戦略語る

●9月9日、モスクワで、対峙激化への対応策について語るスエクのマキシム・バツフ社長
●ロシア産石炭の輸入を促す一方、ウクライナ産石炭の輸入を禁止するEUの動きに懸念を示す



ロシア石炭 中印に軸足

制裁で逆風／価格に強み／侵攻に憂慮

ロシア産石炭の輸入を促す一方、ウクライナ産石炭の輸入を禁止するEUの動きに懸念を示す。スエクは中国やインドの市場開拓を急ぐ考えを明らかにした。日本にも引き続きロシア産石炭の購入を促す一方、ウクライナの現状について懸念を示した。

EJはこれまで石炭輸出の約半分をロシアに依存しており、ロシア産の石炭は輸出先が減少するリスクに直面している。スエクは中国やインドに販路を拡大し、ロシア産石炭の輸出先を確保している。

日本市場も重視。ロシア産石炭はオーストラリア、中国は対立を深める中、中国産石炭の輸入も増加している。スエクは中国やインドの市場開拓を急ぐ考えを明らかにした。

ウクライナで暮らした経験があり、紛争は極めて不快である。「ウクライナ人の知人ももちろんいるし、非常に憂慮している」と答えました。これは非常に微妙で危険な話です。ロシアにはいくつかの石炭会社があって、プーチンの親戚が経営して急成長している会社もある。最大手石炭会社であっても、政権に批判的なことを言えば、どんなペナルティを受けるかわからない。そういう時に、バツフ社長は正直な気持ちから「ウクライナ侵攻は誤りである」と言ったわけです。

実際、バツフ社長と話をしていると、ウクライナを「ナ・ウクライーニェ」ではなくて、「ヴ・ウクライーニェ」と言うんですね。ロシア語では、前置詞ナは地方となり、ヴは国となります。バツフ社長は明らかに国としてウクライナを認めるという立場を、言葉の端々に滲ませているのです。

私たちは記事を書いた後に、ロシア語に直して「この内容でいいですか」と確認してから記事を発表するのですが、チェックした上でもこの箇所は取り除かれず、「このまま残してくれ」ということでした。

22年8月22日に中日・東京新聞夕刊にインタビュー記事が掲載されると、日露ビジネス関係者から「この記事はいい」「スエクの社長からこういうメッセージを取れるのが素晴らしい」と評価されました。これも侵攻ゆえに掲載できた反政権派というか、戦争に疑問を感じる人からの大事なメッセージだったと思います。ただ、バツフ社長は就任から1年ほどで、つい最近辞職しました。理由は分かりません。やはり難しいことがあったのかもしれない。

ロシアの日本人社会は壊滅

モスクワの日本人社会の状況ですが、侵攻前には大手商社やメーカーの駐在員などたくさんの日本人が住んでいたのですが、侵攻後は経済制裁でビジネス環境が非常に悪化して、

多くの人が帰国しました。ロシアでビジネスを続けているとウクライナや国際社会から非難されることもあり、ほとんどの企業が事業を縮小または撤退して、モスクワに残っているのは外交官とメディア関係者ばかりになりました。

在留邦人からすると、日本メディアは欧米とウクライナの主張に偏って、ロシアを悪く書きすぎではないかと言われ、在留邦人の集まりに行くともメディアへの不満が時々噴き出して、「家族を日本に帰さないといけなくなったのはメディア報道のせいだ」と言われたりもしました。私としてはロシアの軍事侵攻は決して容認できませんが、一方で、ロシアで暮らしている日本人にとっては、ビジネスが止まって事務所が閉鎖されていくと、仕事がなくなってしまう不安感があります。その意味でメディアに厳しい目を向ける心理は多少理解できます。

部分動員令（22年9月）で社会に動揺が走る

昨年9月に部分動員令が出され、約30万人の予備役が動員されました。それまでは限定的に、職業軍人や契約軍人、志願兵あるいは軍事会社の傭兵部隊などが戦争をやっていたわけですが、ここで戦争の質が一気に変わりました。誰が兵隊に取られるかわからない。家族が急に戦争に行くことになるかもしれない。こうなったとき、急にロシア社会がざわついて、戦争反対のデモが再燃しましたし、多くの若者が国外に逃れようとしてきました。

あのとき私はケメロボという石炭の町で取材をしていました。ケメロボは地方都市ですが、石炭で非常に潤っている。綺麗な通りがあり、レストランではみんな着飾って食事をしている。街の中は戦争の影響も何もない雰囲気、人々は安心しきっている様子でした。その時に、ロシアが占領したウクライナ南部の州で併合のための住民投票が行われるという一報がモスクワの助手から入り、同時に部分動員が始まるという連絡が入りました。

その時に気づいた人はいたはずで、気づいた若者はもうその瞬間に航空券を取ったんですね。アルメニア行きとかトルコ行きの飛行機の前予約が殺到して、航空券代が一気に値上がりしました。この数時間が分かれ目で、翌日に部分動員が発令されたときには、もう外国には出られない。航空券はすべて予約済みという状況でした。

国防省の広告「兵士になろうよ」

ここでちょっと短いビデオを見てもらいます。これは志願兵を募る国防省の広告です。「兵士になろうよ」という呼びかけですね。～ビデオ放映～

最初にスーパーの警備員が出てきました。ナレーションは、「警備員さんよ！ お前そんな仕事、つまんなくないか？ 本物の男ならやっぱり国を守るのが仕事だよ。」

次はスポーツジムのトレーナー。「こんなに体を鍛え上げ

で強いけれど、何か物足りないものがあるんじゃないか？ やっぱりあれだよな。

最後はタクシー運転手。「こんな運転でちんたら金を稼ぐより、やっぱり祖国のために働く方がいいんじゃないか？」

こんなふうに言って、「本物の男なら国のために戦うのが男じゃないか！こんな仕事でいいのか？お前も男だろ！」と国防省は呼びかけているわけです。

しかし、面白いのは最後の画面です。「給料は20万ルーブル！」と出てくる。さっきまで「男なら兵士になって戦地に行けよ」と言っていたのに、最後は20万ルーブル（＝約30万円）毎月もらえますよというのがこの広告のオチですね(笑)。

高額給料で志願兵を募る

「祖国を守るための戦争」と言いつつ、一方で「給料が高いですよ」と言っているわけです。月給20万ルーブル。志願兵でも、動員兵でも、これくらいの給料です。

地方都市、例えばカフカスあたりだと、学校教員の給料が1万8000ルーブル＝3万円ぐらい。消防士など危険を伴う職業でも3万3000ルーブル＝約5万円です。兵士になったら20万ルーブルもらえとなると、心が揺らぐ人もいでしょう。しかも、入隊時に一時金が出る。家族に子供がいればすぐ保育園に入れるとか、医療費が無料になる、戦争から戻ってきたら好きな大学に入れるといった、いろいろな特典もついている。地方に住んでいる人は、本当に経済的に苦しい人が多くいます。子供たちが学校に行くときに学用品を買うお金がなくて借金する家庭もある中で、応募したら毎月20万ルーブルの給料で、借金もチャラ。万一戦死しても多額の弔慰金が家族に出るといことになると、仕事がない人や給料が低い人は決断するだろうなと思われま。

動員兵士の家族を取材

では、動員された兵士の家族はどう思っているのか。これは非常に危険な取材で、日本メディアでも動員兵の家族に取材して話を聞いたのは、私たちだけでした。動員兵の家族の問題は非常にデリケートで、ロシア社会に負のムードをもたらす可能性があり、軍の監視がとても厳しい。この家族が「日本メディアに取材を受けて、こういう風にかかれた」と軍に言うともう一発で捕まりかねない話題で、何とか交渉してある動員兵の母親に話を聞くことができました。この母親の素性を私たちは明かすことができませんし、またこの母親は私たちを訴えたり、当局に通報したりすることはないと確信したから記事にできたわけです。

中日・東京新聞23年2月20日に掲載された「侵攻1年 家族と兵士」という連載記事の一つですが、この母親は愛国者で、次男に召集令状が来た時に、「次男はその日を待っていた」と言うんですね。母親の両親は第二次大戦で従軍経験があり、「正義のソ連」「正義のロシア」というものを信じて、息子と

娘たちにずっと「祖国を守れ」と教育してきた。この母親も、プーチンが祖国防衛戦と呼んでウクライナ侵攻を始めた時に、「ウクライナはネオナチの集まりだ。米欧の操り人形になっている」「ついに、ロシアが世界のためにウクライナを解放する時が来た」と、すごく心が高揚したと言うのです。

そして、息子に召集令状が届いた。出征の日、「私はこの日のために息子を育ててきた」「祖国防衛のために育てたのだ」と誇らしく思った。息子にロザリオ（十字架）をかけ、イコン（聖画）を手渡して、「主はあなたに勇気と、試練に耐える力を授けてくれる」と言った。息子は「母さん、ありがとう」と言って、雄々しく出て行った。

次男を見送って、「ああ、良かった」と胸を張ったのですが、その日の夜からものすごく辛くなってくるんですね。息子がいなくなって、心に穴が開いた。テレビでは、「ロシアは果敢に進軍している」「ウクライナ軍を撃退した」といった話がよく出てくるのですが、もうテレビも見たくない。自分の息子は今どこにいるのか、もしかして危険なところにいるのではないかと思うと、辛くて仕方がない。街の賑わいを避けてふさぎ込む。モスクワから出征した人は少ないので、街にはたくさんの若者が着飾ってデートをしている。自分の息子は どうしてそこにいないんだと思うのです。

矛盾した思いから見える戦争の世界

政治家やその息子たちはコネを使って徴兵を逃れていきます。ペスコフ大統領報道官の息子は、ナバリヌイ派の人が電話をかけたら、「それは別問題で解決されるから僕は出征しなくていいんだ」と言った。この電話録音がSNSで流されています。「ウクライナへ戦争に行く」と言って出かけた政治家が、途中の駅で降りてまた地元に戻っているという報道もありました。

街を見ると、モスクワは先ほど紹介したとおりです。国防省前の広場でも、若い男女がサルサを踊っている。この母親からすれば、自分の息子は祖国防衛で決断して、ロシアの精神的価値をいまこそ体現するために戦っているのに、一歩家の外に出たら全然違う光景がある。それが耐えられなくてふさぎ込む。「祖国のために息子を育てるのは母の誉だが、去った息子の存在を埋めるものは何もない」と思うわけです。

しかし、この母親は、「ウクライナ側で戦う兵士たちはいくら死んでも構わない」と言い切るんですね。ウクライナの兵士にも母親がいて、彼らは攻めてくるロシアに対する防衛戦をしているのに、そちらは死んでも構わない。いくつも矛盾がありますし、また、この息子が本当はどう思っているのかも分からない。「祖国のために戦え」と育てられてきた息子は、勇んで出て行ったのかもしれないし、仕方なく出て行ったのかもしれない。この記事は、母親のモノログなのですが、これが完全な戦争の世界になっている。現実にはいろいろな側面があるのに、みんなそれを見ようとしないで、自分たち

の中だけで戦争をしているというのが、今のロシアの姿なのだろうと思います。

ウクライナとロシア～修復できない「こじれ」

最後に、クリミアの美しすぎる検事長の話です。ナタリヤ・ポクロンスカヤ元クリミア検事長。日本では「美しすぎる検事長」の名でアニメ風の似顔絵が多く登場しましたが、彼女は検事として首都キエフで勤務した後、ロシアが併合したクリミアで検事長となり、2016年にロシア下院議員に転身しました(21年任期満了で政界引退)。

この人は、ウクライナから見ればクリミア併合に加担した裏切り者という立場ですが、ロシアにもなじんでいなくて、「ウクライナはロシアと異なる主権国家であり、独自の文化を持っていて、それはロシアとの相互の影響の中で発展してきた」と言っています。

21年7月にプーチン大統領が「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」という論文を書いた同じ頃に、彼女も論文を書いて、ロシア人とウクライナ人はかつて同じ民族であったという前提は同じなのですが、結論は全く逆です(中日・東京新聞22年2月7日夕刊)。

この記事を出したら、日本のウクライナ大使館から抗議があって、「裏切り者のポクロンスカヤを記事にするとはいけません」「これはロシアのプロパガンダだ」と言われたのですが、記事を読めばわかるとおり、ポクロンスカヤ氏は、2014年のマイダン革命は「違法なクーデター」と断言し、クリミア併合も「法的に行われた」と見なしているのだから、ウクライナ政府の立場とは決定的に異なるのですけれども、しかし、「ロシアとウクライナは歴史的に同じ民族だ」と言って、ウクライナをロシアの影響下(=支配下)に置こうとするプーチン政権とも一線を画しているのです。「独自の文化を持つウクライナは、一つの主権国家として誰からも主権を侵害されるべきではない」と主張する彼女は、ロシアでも普通に生きていけない難しい立場に置かれています。



以上、モスクワでの特派員生活を通じて私が見たロシア社会と人々の姿をお話しさせていただきました。

<質疑応答より>

—— ロシアの世論調査では一般的に80%以上が侵攻支持とあります。これとは別に、クリミアとかロシアが併合したウクライナの4つの州ですね。一応、住民投票の賛成多数でロシアに併合を求めた形をとっていますが、実際には親ロシア派もいれば、ウクライナ派もいると思います。その比率は、本当はどちらが多いのか。また、もしウクライナが奪還した場合には親ロシア派が今度は抵抗することになりますが、その場合どんな問題が起こるのか、考えを聞かせてください。

小柳：どれくらいが親ロシア派なのか、難しい問題です。おそらくドンバス=ドネツク、ルハンスクの2州やハリコフ州を含めロシアに近い東部の州で、ロシアに親しみを覚える人が多かったのは事実であろうと思います。一方で、これが戦争状態になって、ウクライナかロシアかと迫られた時に、人々がどう考えて、どう行動するかというのは非常に複雑で、ちょっと答えにならないかもしれませんが、私の体験談をお話しします。

私は侵攻の前にオデッサに入りました。オデッサはロシア語話者が多い町で、親ロシア派が多いと言われていました。2014年のマイダン革命の時に、欧州派が親ロ派を攻撃してかなりの犠牲者が出た町なのですが、オデッサで話を聞いた人の大半が、「ロシアは侵攻はしないと思うけどな」と、侵攻直前、数週間前にそう言っていた。ロシアに敬意を抱いていると言う人もいましたし、「ドニエプル川の東側はロシアと言ってよいのではないか」とか、「ロシアがやはりウクライナの守り手であるべきだ」と言う人が多かったのです。

では、今、オデッサはどうかと言えば、街ではほとんどの人がウクライナ語で話すようになっていて、もう親ロ的な姿勢を示すなんてとんでもないということになっています。

この戦争でロシアが占領したあとウクライナが取り戻した町や村では、その都度住民の意識が変わっているそうです。人間は現状を肯定する方向に流れるというのがありますが、ロシアの占領下では親ロシア、ウクライナ軍に解放されたらウクライナ派ということで、新しいレジームに入ろうとするようです。

ドンバスでもロシアに親しみを覚えてきた人が多い一方で、戦争の行方によってその人たちの今後の反応がどうなるか、非常に難しい問題だと思います。

—— この戦争の終結の見通しは、どのようにお考えですか？

小柳：「即時停戦して、市民の犠牲を減らすべきではないか」とか、「戦況が膠着している中で欧米が軍事援助を続けることの是非をどう考えるか」といったことは、時々質問されることがあります。これは非常に難しいのですが、私は、停戦の

ためにはロシアが退くほかないと思います。しかし、ロシアは一度併合したところを決して簡単に手放したりしないという点で、本当に先が見えない。停戦するためにどうすればいいかという以前に、先が見えないとしか言いようがない状況です。

最近の即時停戦をめぐる議論を見ると、ロシアはどこかで調整する余地を残して、併合した4州のうち南部の2州＝ヘルソンとザポロージェは手放す可能性があるのではないかと、ドンバスの2州が死活のラインではないかと、といった識者の話もありますが、ロシアというのはもっともっと吹っ切れて、先の方まで進もうとする指導者が政権内で大きな影響力を持っているので、一度止まっても結局はまた紛争再開ということになりかねないと心配をしています。

—— 北朝鮮の金正恩とプーチンが首脳会談をしましたね。中国の習近平ともよく顔を合わせていますが、実際にロシアの人々は、中国や朝鮮との関係をどう見ているのでしょうか？ 歓迎しているのか、問題があると考えているのか、どうでしょうか。

小柳；極東には私は2回出張に行きました。行く度に思ったのは対中警戒感です。極東のロシア人たちの中国に対する警戒感はずごく強いものがあります。沿海地方やハバロフスク州、アムール州といったロシア極東地域はもともと19世紀半ばまで清国の領土でした。欧米列強の圧迫で弱体化した清国の状況に付け込んで、愛琿条約(1858年)、北京条約(1860年)によってロシアが奪い取った領土です。

この土地に開拓民として送り込まれたのが、ウクライナやベラルーシ、モルドバの農民たちで、1870年頃からたくさんの人たちが極東に入植して現在に至っています。彼らは自分たちが新住民であり、もともとこの地に住んでいたのは中国人や朝鮮人だったことをよく記憶しているので、やはり中国の出方が気になるのです。いつか中国が「あっ、そういえば19世紀にわれわれの土地を奪い取りましたね」と言い出したらどうしようかと心のどこかで思ってるんですね。

それと、中国の「人口圧力」があります。ロシアのシベリア・極東地域は広大な土地に人口はごくわずかです。土地が余っている。ここに中国人が今どんどん入り込んでいます。ロシア政府は極東開発キャンペーンで、広大な土地をかなりの優遇策で農場経営者に分配しています。そういうものを利用して、表向きの代表者はロシア人なのですが、中国資本が入り込んで大規模な農場経営をやっている。作物は大豆です。豚の餌にする大豆。米中対立でアメリカから入りにくくなった大豆を近場のロシア極東で大量に栽培するようになっており、国境を越えて大量に入ってくる中国人農業労働者に対するロシア人の警戒感が高まっています。

また、沿海地方にはソ連時代に北朝鮮との協力のできた「高麗人参の里」という農場がありますが、ここに中国人が来て

高麗人参を盗んでいたり、アムール虎の密漁をしたりといった事件も頻発しています。プーチン政権と中国の習近平政権は今とても良好な協力関係にありますが、極東のロシア人の対中国観は複雑で、むしろ警戒感の方が強いと思われます。

—— この戦争はなかなか終わらないと思いますが、現在の膠着した戦況とウクライナ側の反転攻勢の行方をどう見えていますか。また、来年3月の大統領選挙でプーチンが再選されたら次は全面動員ではないかという話がありますが、果たしてロシア社会は全面動員に耐えられるのか。部分動員でもあれだけ動揺が広がったのに、全面動員できるんだろうかという疑問があります。今後の戦争の見通しはどうなるでしょうか。

小柳；反転攻勢の行方ですが、ウクライナにとっては欧米からの武器支援が途絶えると打つ手がなくなるので、それが非常に懸念される場所です。アメリカやNATOの出方次第だろうというのが一つですね。

私は、ウクライナが勝利するポイントの一つは、ゼレンスキー大統領が強権に徹して非情を貫けるかどうかではないかと思っています。よほど強い指導者でないと戦争という難局を乗り越えることはできない。その意味で、ゼレンスキーの指導力が続くかどうかはもう一つのカギだと思います。

ロシアですが、確かに全面動員が発令された時にどうなるかというのは気になる場所です。あるロシアメディアの人に、「全面動員になった場合、国が持たないのではないかと」と疑問をぶつけてみたことがあります。その人は、「いや、出るべき人はもう全部出ました。あとの人は、言われたら嫌々ながら戦地に行くでしょう」と予想していました。実際、タクシーの運転手さんなどに「追加動員があったらどうしますか？」と聞くと、「いや～、気乗りがしないんだよな。でも行くしかないか」みたいな人が多いです。

一方で、プリゴジンの乱が起こったように、ロシアの社会や経済がどこかでポキッとくる可能性があるかもしれません。ロシア崩壊説を唱える人がいますし、逆にそれはありえないという人もいますが、私はどちらかというところとあると思っています。何故かと言うと、逆説的ですが、今のロシアは国がガチガチに固まって柔軟性がなくなっています。プーチン政権にみんなが従う状況になったときに、今の硬直したロシアではどこかに無理がかかって、いきなりポキッとなくなってしまう可能性があるのではないかと思います。

略歴；小柳悠志(こやなぎ・ゆうじ)

東京外国語大学イタリア語専攻、同大学院修士課程修了／2006年
中日新聞社入社。石川県小松支局、三重県熊野通信局、名古屋経済部などを経て、ロシア国立人文大学留学／2019年11月～2023年
4月モスクワ特派員／現在、中日新聞名古屋本社 経済部

JICのロシア語留学・研修

35 年間の実績だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に日ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 35 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学4月生・募集中



オンライン
相談受付中!

期間：2024年4月1日より10ヶ月

締切：2024年1月12日

モスクワ国立大学 1,158,000 円(授業料 10ヶ月)/予価
サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,039,000 円(授業料 10ヶ月)/予価
ゲルツェン教育大学 908,000 円(授業料 10ヶ月)/予価
ウラジオストク極東連邦大学 418,000 円(授業料 10ヶ月)/予価
ミンスク国立言語大学 422,000 円(授業料 10ヶ月)/予価
※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金
および取得手数料などががかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)

◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

創価大学 ロシア語スピーチコンテスト

ロシア語の学びを通じて交流の輪を広げよう！

日時：2023 年 12 月 17 日 (日) 12:30~

会場：創価大学 中央教育棟 (東京都八王子市丹木町 1-236)

形式：ハイブリッド (対面+ビデオ)

部門：①エレメンタリー部門 (対面) ②スタンダード部門 (対面)

③スタンダード・ビデオ部門

テーマ：本コンテストの開催趣旨に沿うものであれば自由

申込期限：2023 年 10 月 31 日 (火)

★原稿提出締切：2022 年 11 月 19 日 (日)

申込フォーム URL：<https://forms.gle/v98hHigvcFewe1n66>

問合せ：russia-center@soka.ac.jp

◆◆編集後記◆◆

▼本号は、たくさんの方に寄稿していただきました。バルト三国ラトビアでのロシア語研修体験記(光嶋桜子さん)、ロシア語映画発掘上映会の顛末記(守屋愛さん)、『反戦・平和の詩人 四國五郎』の書評(山口ミルコさん)、そして連載コラム「こんな時代にロシア語のすすめ」(黒田龍之助さん)。皆さま、ありがとうございます！どの記事もそれぞれに面白く読みごたえがあります。▼中日新聞・東京新聞の前モスクワ特派員・小柳悠志氏の講演録もウクライナ戦争前後のロシア社会の動きを知る上で、とても参考になります。▼ウクライナ戦争がいつ、どういう形で停戦・和平を迎えるのか、まだ先は読めません。しかし、ロシアは将来にわたって日本が向き合わなければならない国であり続けます。そのためにも、日ロの人的交流・文化・学術交流を絶やさぬよう、私たちは今できることをやり続けようと思います。(F)